


 椿說弓張月
 編前
 二



^13
 3908
 2



西 へ 13
3908
2

鳥朝外傳 椿説弓張月前篇卷之二

東都 曲亭主人編次

第四回

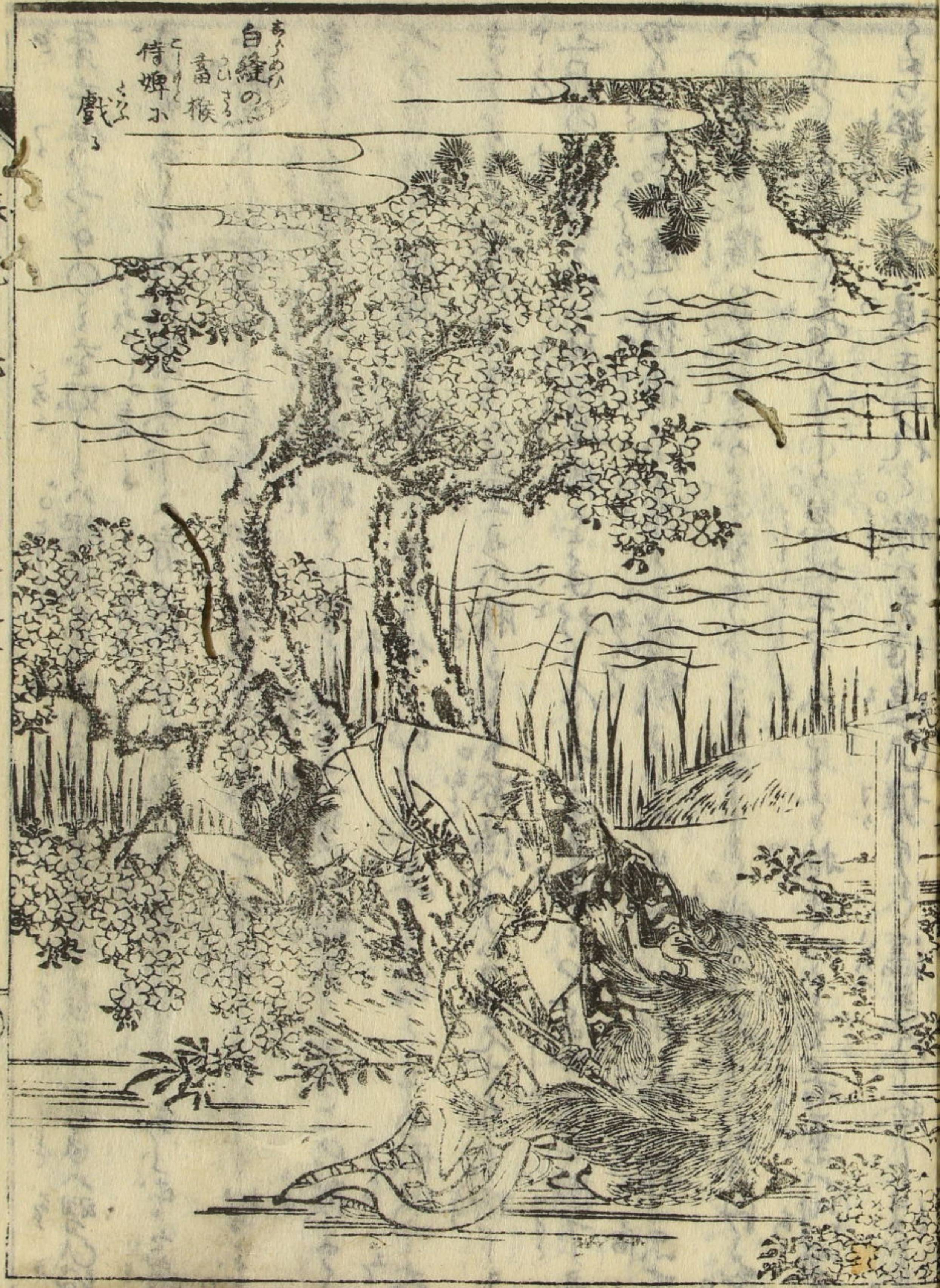
老猴塔に登りて主を辱しむ
病鶴始を出る 恩は答ふ

八所冠者鳥朝の重季山雄を喪ひてより。春の夜の短きも寝覚えたる夢の中は一人の女子白綾の袿にあはれぬの袴を紅ある一枝の花を頭挿し。端然とて枕方立在りて。近曾君の書ひを記し吾牙恙あるはつるれ。今昔あはれまき子のけりも君明日の事を將て肥後了。赴き阿蘇の宮にほろりあはれ。その心を放りかたき艶みして且賢き妻を娶り。その後楯をほろりあはれ。吾牙彼処より別あはれまるとい

春説弓張月前篇卷之二

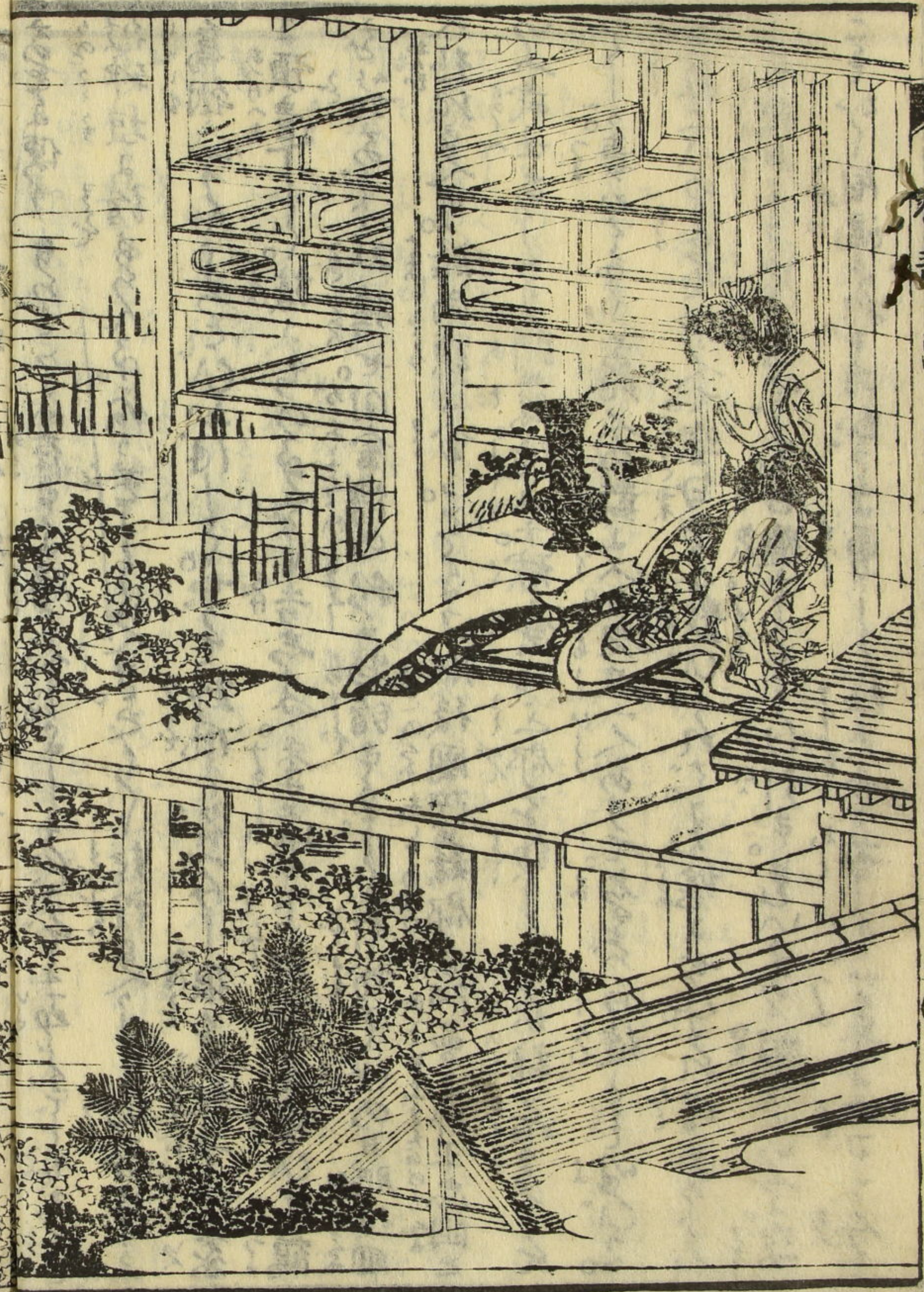
ともえりて南海の果みく見えぬまきよこといふとあつた
 見え入りつとこのゆを考まふ近曾養ひを得るその志ありつと
 いひより彼女子摸様をよまふかほる鶴既ふ神通いれ吉祥を
 告るよと思へれば聊も疑りも詰朝主人權守孝子遠が母屋より物より
 の序ふそのゆふあふは宮中よりこれ一曾一隻の鶴をほりてこれを
 曾祖義家朝臣の放せりのゆ見黄金の牌を著りてこれを肥後國
 阿蘇の宮へ納まふせよといふ美夢を蒙りての若くは彼地はむき
 置とせよといふは豫る鳥朝の智勇を憚りて之を懼れぬと
 置するふせよは後五所領の地をも奪られぬの仇もなりやせんと思ひ
 居れる折あるは六僥倖と潜りて肥後五所曾平四郎忠景の
 子に三郎忠國といふ武士ありて領地も廣く家も富たくては彼人

のまは傳りたりこふ存する勝人といふはこれ西へも東へも
 彼神垣は指り入りふゆりきと起程多しと回答せし
 鳥朝はゆくゆくといひおほくやと野風と名づけ狼を紀平治の家
 へ預遣し候もちのゆも告るを季遠が下所之を備ひて鶴
 をかかると扛擔せ回會侍の移り物指りて打たつ次の肥後國
 へ赴た入り詰兩頭に分るとこよ又肥後國阿蘇郡に阿曾三郎平忠國と
 して武士ありたり阿蘇院摩球磨の二郡を領し家隸居たりて
 了りて妻はそとありて人の數は少く只一人ありて名を白縫とせしむる
 今茲二八のまきよむて空白中を歡ひしれどこの嫁はせんこれ婿はあらん
 といふ彼此よりいひませも白縫はさうけりけきといふは板とつた
 こまか風流なれそのむきよ勇しく壯夫も若くは平は太刀を合



白縫の
畜猴
侍婢
戯

春
月
長
月
川
言
卷
之
一



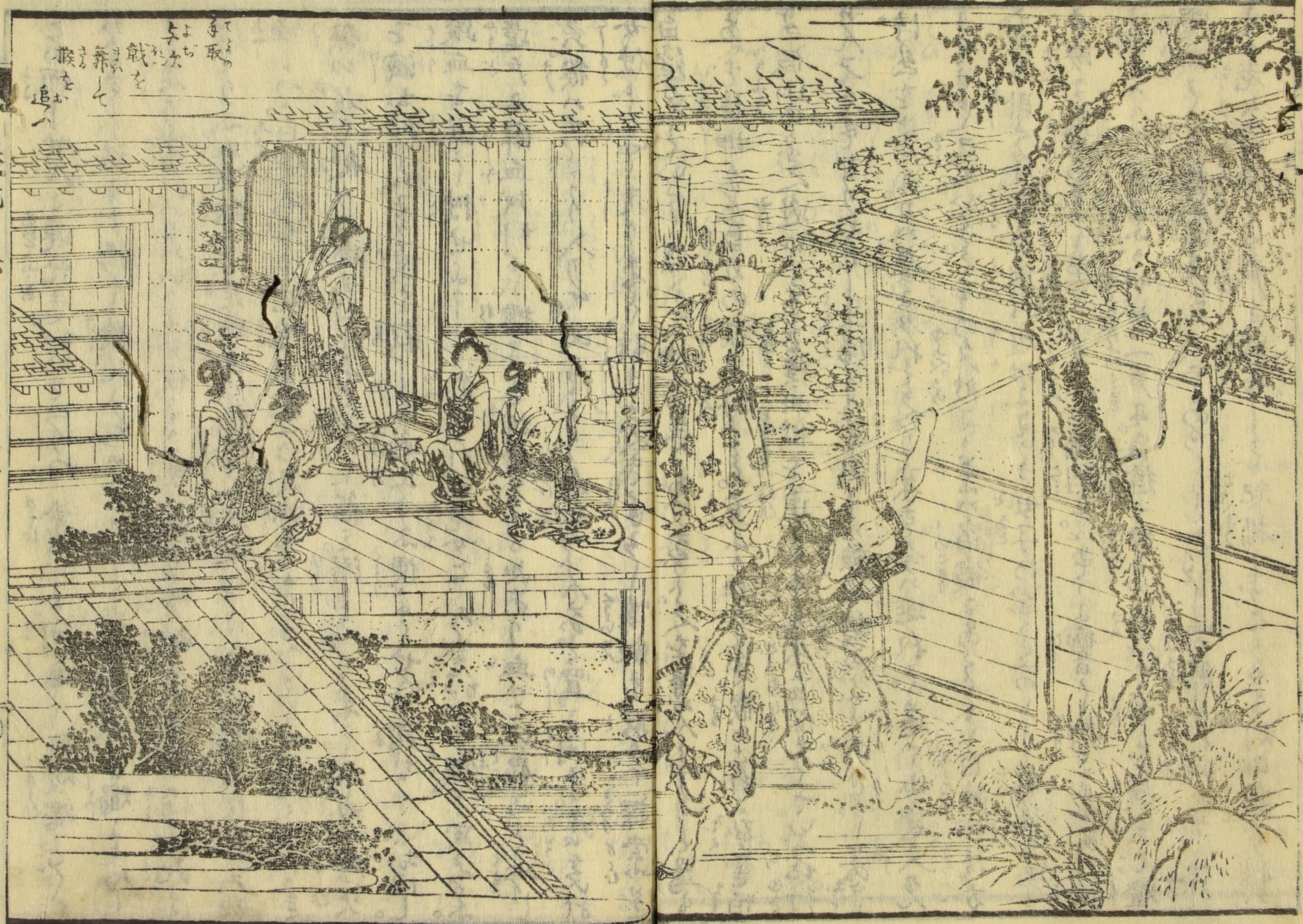
料
言
可
張
片
前
篇
卷
之
一

身を使つるの心を好く腰元ある女の童ふするす長刃の一まの習ひ
 するもあつその情愿を下し首を比るのまた智勇の武夫はあつたを
 を許さしと誓ひひらく遠くおよぶあ人もあつて婚縁とのさりけるを
 あるは白縫の年暮畜狎るうつく愛する一隻の狛ありたりこの狛よく
 人の言語を解得立棄こくをも做しゆるる年を経くその形状を大
 まうざりて今ハハ九つの重母の勝るも劣はへる入をさうり折しも
 二月の下旬なれば庭の邊櫻をまぢりんとてこも葉をひく女使を樹下
 あり立せ白縫ハ彼狛を牽る椽類より出この枝彼枝と指し示て
 おへつる狛はむあがむをそとさふあつて裳もあつたありけを
 つらつらとて急地走り下り抱きつるを若葉ハ河野
 らも驚きつ退きつれと狛は追ひ捕りて淫せんせはははは

白縫えいし腰元で汝も生はありあつて人を辱めんすうと罵も
 あへも長押ある長刃の鞘を外し直ふけんも狛ハこれに驚き怖
 道假山のうへ逃げ入る後此狛を追するも木立間あつていつれ行
 らんええまぢりぬ一交尾するもあつた強く縛めよと仰せしその音
 は是をよみ日ハ暮よりれど入り来む今ハ逃れく遠く山もや入ん
 してさう己ぬかきその女彼も葉ハ宿寢はあつて白縫の枕方
 ちうり目する春の夜は短はもうき女子のいぎとあつて前後もあつ
 せ既ハ夜もいさく更く丑三の漏刻もさうは響く折しもあれ何
 ころあつん彼若葉う叫若一声音白縫も驚たさう首を擡て燈
 燭滅く善悪もさう人やあつてさう喚寢され次の間子外
 くる老女寢惚くる声は回答く起揚うとこもも灯の滅くれハ

取
 手
 取
 次
 戦
 を
 兼
 へ
 追
 へ

春
 見
 月
 前
 後
 二
 三



春
 見
 月
 前
 後
 二
 三

何とせんと連忙きかいたらつて索れども間あきの燈燭もく
 なるてい海舟さうく騒だもちどくく火を索め子燭ようり
 く走りまればさいうし女使も葉の吭を啖破られ朱は染み死
 はりり血を踏くる足跡あつて全く人間のこころねい主従おれた
 怪つ白縫あむ沈吟してこの足跡をゆくえもまうあうもたき
 猴の足む彼も逐まつてをふく怒潜入りまう間毎の燈火
 を滅おれいもう葉を殺し逃れふ便よくせんの為なりとおほし
 蹤血を認り捜せようし仰せられ老女ころをほく廊下たえふ
 遣戸み鮮血拭引く櫓子を押破るるあり血この處みく歩し
 ぬ後ハたうり入りぬやうり逃出つて人あど罵る間うそ言ふ
 女使もや走りまう駭きまきまう懐劍を取り探索あま
 ともま見えその時父の忠告をたたく走りまう白縫の憤り
 堪むし候若乗は痛むんとつるさうり落もあ物なれい
 忠國はく大女怒りその許まきりのあまをさくおのゆるる即おを
 百せく焦燥ハ一人の女使走りゆきてその音を告あまもる時も後
 手取の次同ふ三郎大矢新三郎越矢源太松浦二郎吉田兵衛打
 手紀ハ高間三郎同四郎あんど一人當千の家隸もさ庭門より走
 るれハこの時忠國端ちり出さ如此ハのりも木を伐草成林を
 らひても彼猴を追ひ捕り打殺せよといまま記あま仰せられ皆集
 りんと回答して東西より走りまう蕉火よりつてしつ館の四隅を索
 るまうその音もふせまう西の衡門のうまあうりて只今築
 垣を越え逃れりありり手取次月影も透えり手戟をつん

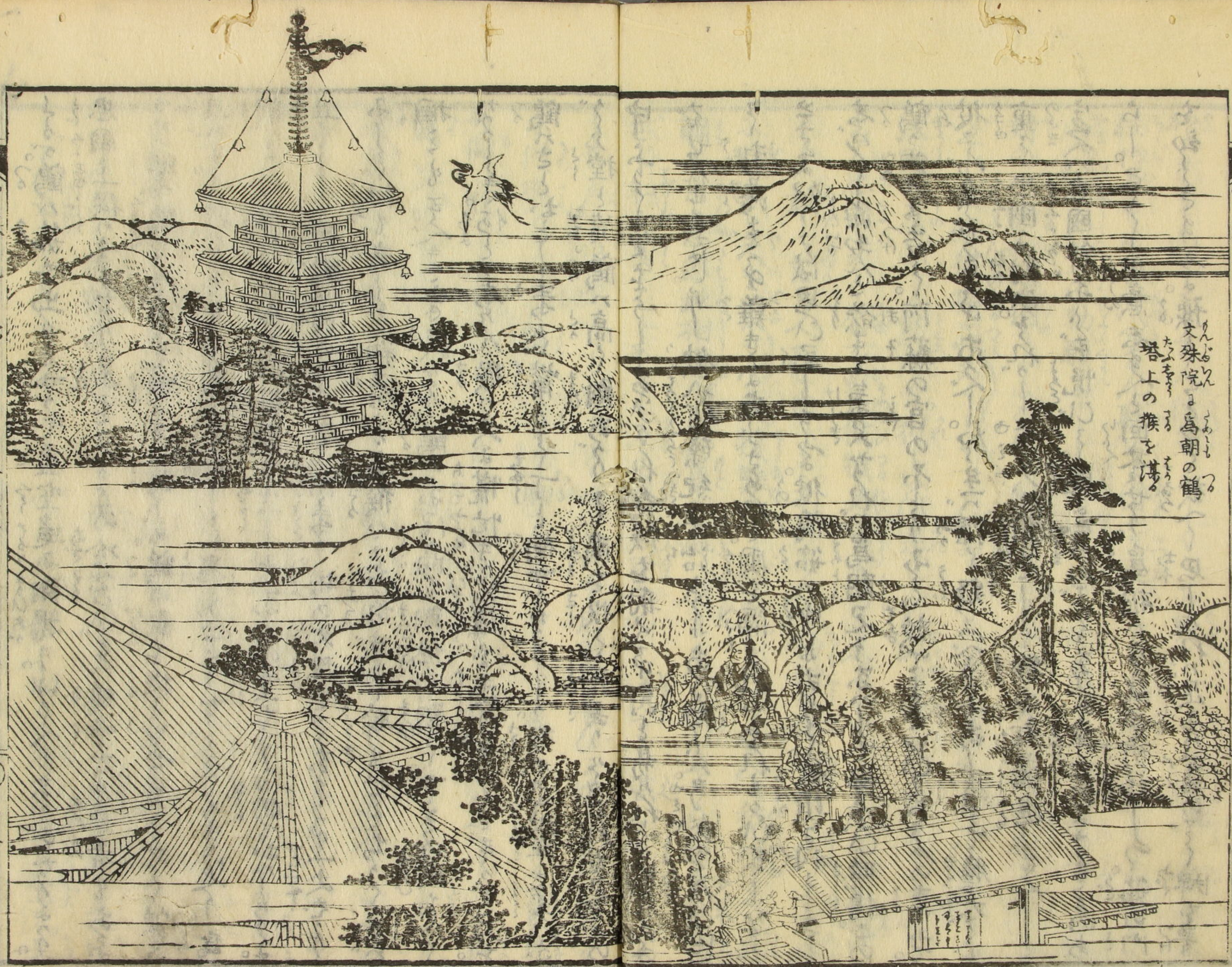
春見の長月前篇卷之二

と一々射忽地相を本傳の。対面へ跳立たり。さる猿へ門外へ逃れさせし。
とく逐多くと嗚呼。衆皆とらるる集来と。門をさと押入り。き花をさし。手
追惹り。尊つ。阿蘓山のたわと。支殊院より古寺あり。この寺は
熊本は同名の寺 弘法大師の開基なり。ちるんき伽藍く。件の徒の此
寺の門前は彼猿を追つめり。今ハ易しと思ひの対猿の築牆を跳え
て裡へ入り。塔の火珠は走り登りぬ。つ彼が往方ハ入定めり。さる
裡ふろく。とらとつたます。慌しく門扇をうち敲き。阿曾忠國の意
隸も。まさぐりのみすく。あたり。門を披たると音や人の門守の老翁を
いと回答らむ。とす。頃も披す。まさぐり音あひ。後ややく。門
を披す。衆皆裡へ入り。たれと。鞭く捕へん。さる。鳥の森をさ
る。鳴声。山陰。陽旭。少。馬
さるやめ。活々の士卒。類。ま。この光景をえり。あれ射す
落や。魚。燥。この塔五重あり。さる。岳の上あり。前ハ怪木
屈曲して枝をゆへ。霞。籠雲。後。亭。し。く。の。高を
と。縦養。由。李克用。なり。射。と。ん。あ。た。心
ま射。損。た。吾。の。主君の辱なり。と。し。れ。表。ん。つ。ふ
もの。な。猿。は。道。下。房。を。こ。入。む。け。打。さ。或ハ
睡。する。さ。ぬ。さ。の。形。熱。は。接。なり。忠。國。歯。を。切り。さ
大。怒。安。ぬ。さ。家。累。代。武。門。は。列。了。れ。又。不。肖。せり
さ。人。の。為。は。蔑。られ。さ。此。の。畜。生。我。を。恥。す。が。の。に
し。立。地。は。打。殺。し。臨。と。なり。さ。あ。さ。ら。い。籠。入。辱。ら。ぬ。さ。

猿の勢を打殺し、臨とせしふあさら。いさ。籠へ辱らぬ。

かききをありし人法然とてくち歎くがごとく一法は當寺の
 住持この身を浅き人職事僧を遣はし忠國よのせらるる抑
 山ハ仁明天皇の勅願あり。弘法大師の用基なり。特は彼塔め勅
 封の仏舍利を納ぐる。これに對ひて弓を引ん朝敵佛敵を
 至し且縱彼猴罪ありとて一寺内よりそのを無下小殺す
 法師の忍びざる所なり。彼といひ是といひ此の宥免は預へしと速
 ち忠國は眉を聳彼猴美場は走り入るも既小人を殺せ
 うの敢て怒すべしあるも志うあれど勅封の佛舍利を納る宝塔
 小對ひて矢を發さん其の後難そりかじ。その何とせんと愁悶るも爲
 朝も用意忽地相違し。舊の處へ退き其の猴はさしひ勢力出て指
 さし取る事をもめも忠國は憤り堪も爲朝も公の
 中ふりく事をもめも忠國は憤り堪も爲朝も公の
 むせんまじし。彼ハ斬磔紀平治とみあやむる弓矢を用ひし
 り打落まるとの難きはあつたれど國を隔たれはれも公の
 とすまがさは思ひ屈し多々彼鶴笱の中みあり。俄頃羽とま
 志つて飛出んと欲する氣又やれは爲朝又さかしてゆきひ曉得この
 鶴の夢又よ生れ阿蘇の宮のふりみ。放てよといひはるの事
 彼らうらやまをりあへ。か生ハ深く疑ふべき小あへんとて膽大
 重く忠國は對ひそれ。弓矢を用さし。猴を打落進み人
 宣への忠國斜ふも悦び。既又宣めてくあふ幸これよすまのあ
 らし。さし用意志ま人と回答せり。爲朝ハさし祈請し。笱の門
 をゆきまの豫とみ放へ思ひ足少舊のて牌を着

春虎弓張月之前篇卷之二



春説弓張月形篇卷之三

春説弓張月形篇卷之三

文殊院は鳥朝の鶴
塔上の旗を揚る

鶴ハ如を出るとやうて。虚空遙小翔揚リ。けへもあつた。さうなり。
 忠國主従のさうなり。正を正するの冷笑ひ。あ鳴呼する愚心者もあふ
 うま。鷲鷹やんとこそ。猴をも捉らぬ。鶴の獸を捉らぬ。さうなり。
 及びさういふことさういふこと。飛せり。たゞさういふこと。鳥
 朝もこの光景は。あつた疑念を生。さうなり。空をうつつ眺ておひらる。
 且く。彼鶴ハ西の。翔来り。塔の火珠をたなへる。一丈さう
 ふ。処も去らぬ。翔居るを。候はり。ち仰き。瞬もせも。ちうく。あ
 掴も。さへ。守り。鶴ハ。高く翔低く翔。やその間ちうく
 鶴ハ。さとおと。ま。嘴。丁と衝。や。候ハ。心地血。塗れ。
 まま。揚。呼。感。鳴。已。忠國ハ。喜。堪。鳥朝。も
 不。後。を。後。脊。胸。さ。は。ぬ。れ。死。目。鼻
 の。間。影。砂。の。あ。忠國。を。拍。あ。
 鶴。の。地。も。あ。い。この。砂。を。銜。候。の。眼。や。せ。鳥。
 飛。禽。と。も。事。臨。く。剛。敵。を。拉。く。の。智。を。さ。う。と。あ。鳴。呼
 音。なる。と。噴。賞。更。鳥。朝。對。く。禮。儀。を。正。く。も。鳥。の。あ。
 今。の。あ。不。思。像。は。仙。境。の。客。さ。う。名。告。さ。ん。鳴。呼
 あ。父。為。義。不。負。を。物。さ。う。あ。一。朝。ハ。説。畫。
 彼。鶴。の。さ。う。と。さ。う。と。さ。う。と。さ。う。と。さ。う。と。さ。う。と。
 一。幸。ふ。と。さ。う。と。さ。う。と。さ。う。と。さ。う。と。さ。う。と。

春記

三

それこそいふ事。と思ひし。源家の世に在せし。昔は骨柄平
人などいふ事。世に果してまゝ。それし。不女もいふ事。の教も
入事。の。蟬ひもいふ事。女児白縫を遣はせて。晋秦の好を掃く。いふ
縁あり。いふ事。又の鳥朝も。希と。親兄弟も。遠き。て。死
は。あまのうき。計り。より。いと。宣ふ。あまの。阿曾の家。隸も。より。限り
あまの。万歳。を。祝き。か。忠國の鳥朝を伴ひ。士卒を將。こ。誰。喜
つ。住持の聖僧。彼後。死を哀。い。なる。罪犯。あ。せ。よ。寺。逃。来
し。の。遂。救。ひ。け。し。を。と。て。屍。山門の外。埋。せ。ひ。を。好
ぶ。の。それ。墓碑。を。作。り。け。後塚。と。い。ひ。と。あ。ん。

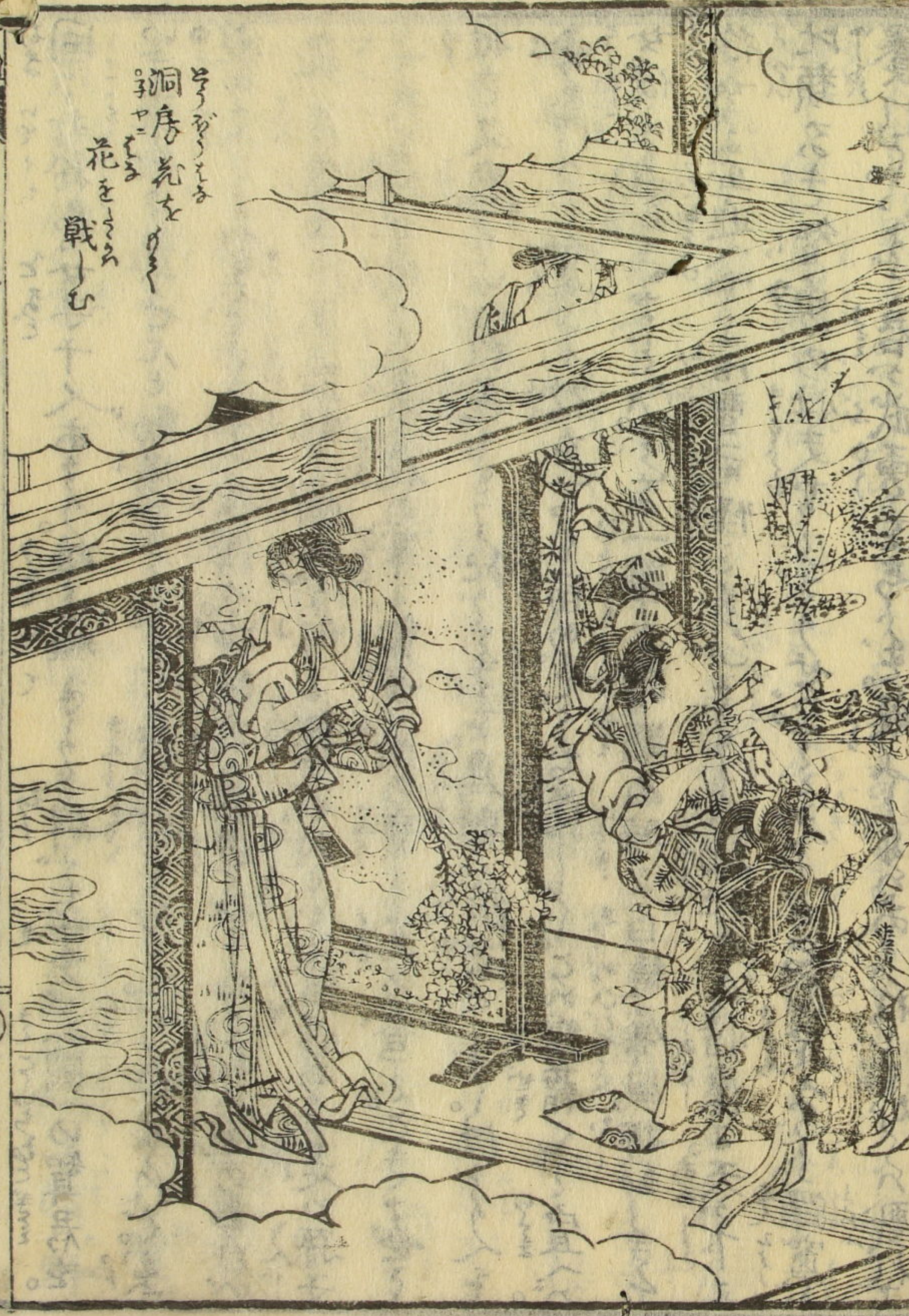
第五回

白縫風流女兵を操ふ
鳥朝勇敢九州攻伐を

阿曾之郎忠國ハ當日鳥朝を伴ひ。いと厚く。管待。女児白縫。あ
まの。物。を。い。ひ。顧。の。智勇。を。稱。讃。せ。され。と。白縫。ハ。い。ま。は。鳥
朝。の。為人。を。あ。ま。ざ。れ。ば。と。こ。も。兼。引。さ。し。あ。彼。人。ハ。父。の。爲。に。恥。辱。を。受
る。恩。あ。れ。ば。その。契約。を。破。らん。義。も。い。へ。り。と思。ひ。入。り。と。か。く。り。と。回。答
し。忠國。大。よ。う。と。い。ひ。や。り。日。を。卜。吉。席。を。設。け。酒。食。盃。盤。を。あ。り
や。く。悉。矣。を。竭。し。その。夕。鳥朝。白縫。を。妻。あ。ら。せ。り。か。く。り。智。姻。の。式
も。果。て。後。一人。の。老。女。嫗。を。兼。り。前。す。と。爲。朝。案。内。と。い。ひ。白縫。の。卧。房。を
透。ひ。つ。廊。の。あ。ま。く。ま。つ。り。ま。つ。り。時。彼。老。女。又。い。へ。り。地。処。に。そ。姫。の。外。房。を。侍
と。い。ふ。爲。朝。ハ。何。氣。あ。ま。く。障。子。引。あ。けて。入。り。へ。忽。地。白。き。赤。い。夜。も。ち。襲
と。素。練。の。玉。禱。う。け。る。女子。二。人。よ。一。枝。の。櫻。花。を。食。む。と。声。り。け。て。人
と。う。を。爲。朝。腰。あ。り。扇。を。あ。り。九。右。を。丁。と。ち。落。し。す。と。い。ふ。人。と。あ。り。と。

洞房花夜
花を
戦

夫の死に
月夜に
花を
戦



村計
月夜
前篇
卷之二

同打扮ある女子十人あり。雄々雌々より群がらまらる。三國一の智君を
 いざ祝まする。かゝせんと動揚りまき。りての櫻の枝をおも。打んとまられた。糸
 遊の糸。あやしくも。搔潜り。押隔或ハ搔遣りけり。扇小風のあれが
 あや。花罪くし。散乱。蝴蝶は似る。鏡見の閃くも。又風情あり。是ハ孫子
 が女兵を操る。彼ハ太真。花の軍。留奇南の熏と。花の香。ときまさせ
 扱き又靡く。しづれ花も。つらぐまを。鳥朝ハ。白若と。ほろり人を
 女使も。驚馬ま。おどい。この一帯。躊躇ぬ時。白縫屏風。押ゆき
 徐ゆる。出迎へや。曹司怪。この。切たりの情愿。天が下。お
 比類なき。智勇の。丈夫なる。せす。と。おひ定ま。深慮ハ
 養れ。い。君ハ。武勇を。疑。あ。ね。か。戯れは
 かせ。正。五。の。過。あ。怪。ま。ひ。そ。勝。ハ。又
 憎。は。鳥朝。背向。よ。ん。あ。り。て。千。列。の。石。ハ。轉。ま。も。皇。朝。を。打
 り。の。世。ハ。あ。り。お。り。け。え。ま。況。女子。の。軍。配。ハ。い。は。さ。う。も。え。の。の
 う。ま。と。笑。ひ。ま。を。女。使。も。立。より。て。あ。り。外。房。ハ。誘。ひ。ぬ。が。て。夫
 婦。睦。一。借。老。の。契。洩。ん。ん。え。一。忠。國。も。斜。あ。り。ま。れ。ま。り。
 厚。く。管。待。せ。一。は。鳥朝。の。威。勢。中。や。朝。日。は。昇。る。
 通。も。あり。又。の。智。勇。を。精。く。胡。越。の。お。り。ひ。を。ま。り。の。も。あり
 士。の。好。を。通。ま。り。と。ひ。ま。り。大。刀。馬。あ。り。を。贈。り。
 嚮。ハ。管。待。の。厚。く。ま。り。を。陪。話。り。る。この。時。ハ。町。礫。紀。平。治。ハ。野

春記 別冊 前巻 三

風^名根^のを^を牽^ひ妻^づの^ハ代^を將^し豊^後より^ナかり^し爲^朝より^コひ
 おば^ら々^々叮^々々^々扶持^しさ^らば^いま^も隨^つる^りの^を討^つひ^びて^九別^を
 一^統ま^へて^既合^戦の^用意^をま^ま折^り菊^池原^田徒^勝の
 軍^兵を^領く^寄せ^まあ^らせ^し後^は先^まる^く紀^伊人^を征^ます^の後
 阿^曾忠^國を^安内^者と^して^彼城^は推^寄せ^し一^戦は^切從^りし^を
 軍^のの^まを^あと^して^城を^落し^し十^餘箇^所凡^二十^餘度^の合^戦
 一^度も^後を^さり^し爲^朝の^強武^畧ハ^ナん^士卒^はづ^も勇^力
 中^も紀^平治^が礫^を取^り次^組打^亦足^萬夫^不當^し加^旃敵^陣
 陣^を夜^討し^し時^に彼^野風^と呼^ぶる^痕跡^は陣^中に^潜入^り夜^巡り^し
 兵^士を^突殺^し主^を引^入是^をわ^かせ^し爲^朝ハ^一歳^中

九箇國を平吞し筑前国太宰府に居城を構ふる。撫追補使
 とかり賞罰を掌り。税斂を薄く寛仁政を施す。い
 國氏稱讚し。鎮西八郎ごのとをり。不題少納言入道信西ハ爲朝
 をい憎む。彼人豊後へ下りし後も人を遣はし其の放勢を
 探りせし。この丁海香推宮の神人内通中。備細は折も
 しまとありひ居る。久壽二年の春一院^{鳥羽}鳥羽の成善提院の御所
 池を掘らせ多し。祇は是究竟の事よしとよろこび。潜は上皇は
 えちりたる。誠中ハ爲義ハ八男なる爲朝。筑紫ありし寄。記鶴
 を獲たりとやめぬ。その鶴ハむ。義家が放せし。今も黄
 金牌を著る。形ハ鶴よりも大き。鳴声高くはむとせん。や
 く爲義ハ仰る。彼鶴を召のふ。池の汀ハ放る。いと愛とかり。と

春上元...

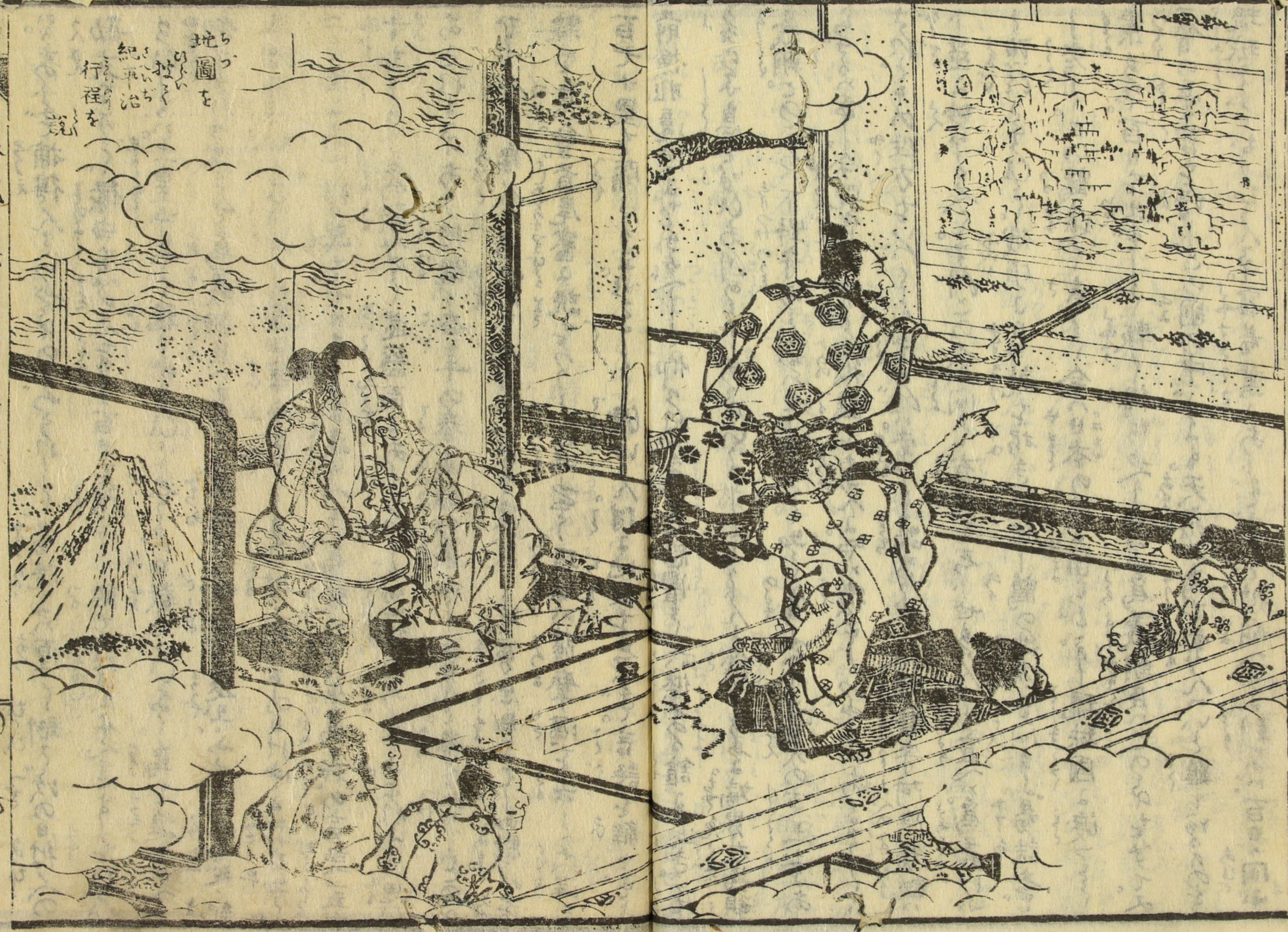
指割ちて活へのそ。多入り。さう極は景延紀平治の只管路を急ぎまゐ
 我日もあぬぬは帰りのなり。直は為義朝臣に見えすわいせ。景延紀平治は
 朝の書呈を獻まは紀平治の為朝の書りし。入る所を審は演説あり。
 為義朝臣の縁由をひきく。大に愁ひ多し。為朝の物を惜みて父の禍を顧
 みる。のありね。偽はあへん。護者路は横まは。いりたる
 御知を並あへん。量るじ。されは。放る鶴をいません。只為朝の旨
 をや。いんを。て。院の御所。為朝の鶴を獲り。いりたる
 春は。の。放遣り。いり。せん。迷惑只の
 子。え。上皇。為朝の近曾宰府
 あり。武威を逞ま。鶴を放せ。偽は。惜ま。せぬ
 あり。その罪を違救。速は。又為我を解官せぬ。
 前檢非違使。仰。為義恐懼。六條。館。返さ。右
 多。息を。の。い。と。候。嫡男左馬頭
 義朝。下野守。せ。宣。普天の下王土。あ
 ら。今。彼鶴を索人。や。獲。い。あ。り。
 され。往か。定め。路。人。阿倍易読の
 ト。妙。人。この人。有無。せ。宣。為義け
 と。俄。俄頃。易読。放せ。鶴の往方を。易読。せ
 一考。この鶴遠く去り。今日日本の地。琉球國は渡。り
 一層の憂。増。この國の中。天。鳥を索人。いと難。の
 琉球。ちり。容易業。あ。彼國へ。到。百。日。回。小

本説年別月前篇卷之三

十一

地ち
圖つ
を
紀
平
治
の
行
程
を
説
く

春説弓張月前篇卷之二



春説弓張月前篇卷之二

十八

へうまのむを捕得人といひつるのまらふれり。易読より厚く酬て次の日村人の
 勳文をりく。縁由をひえたり。百日を限りて鶴を尋出せしむるをねひ
 まひ。上皇ややく聴させまひ。意ふ日数とひあひ鳥を進せしむ
 仰下されり。うて鳥義朝臣のまき。安堵し御所を退出ふ。景延紀
 平治の仔細をひひく。直に宰府より入る。彼二人の日れ中は都を出る
 二百里にあされ。路を七日をりて走りつき。易読のト並為義の言語一五
 十をり。鳥朝び迷惑百あり。忽地は宣ふ。これかと思ひ
 あされ。ひあ。彼鶴が本年の春南海の果み。會人と夢ま。この
 なん。衆人のせ所をひひ。ひを定む。一。男忠國を。め。野村家
 隸と集會首尾審し。説き。宣ふ。琉球の薩摩瀉を去り。大洋三
 百七十里を隔り。ひひ。渡り人。地理を。言語を解せしむ
 一。や。彼鶴の願はあり。それを百日間。素ひん。い。おほつる。かの
 謀あり。ひひ。宣ひり。時。八町磯紀平治班を。生れ。祖父へ
 え。琉球國の人。なる。彼國のひま。入。を。生。平。ふ。り
 びせ。ひ。の。略。を。琉球い。流。虬。作。地。界。萬。濤
 蛟。蛇。と。此。れ。水。中。に。浮。む。と。より。これ。名。つ。或。い。同。國。生
 虬。を。伐。り。兩。顆。の。珠。を。ひ。り。故。に。流。虬。又。琉。球。と。名。の。異。説。あり。その
 人物眼深く鼻長く頰婦く類せり。男子ハ鬚鬚を刺女子ハ墨灰
 りて首み。その都を那覇と喚び。王城を奉神殿と号し。漏刻
 瑞泉池。中山牌坊。木の諸関門あり。乾の山を八頭山といひ。又東
 小天界等寺。西に圓覺等寺あり。迎恩亭。花籠嶼の北にあり。を去
 り五里ふ。天使館あり。又去り三十里ふ。歡會門あり。又南に一

琉球國の
 圖説ハ和
 漢三才圖
 會卷十三
 卷六十四
 新説をま
 小抄ま

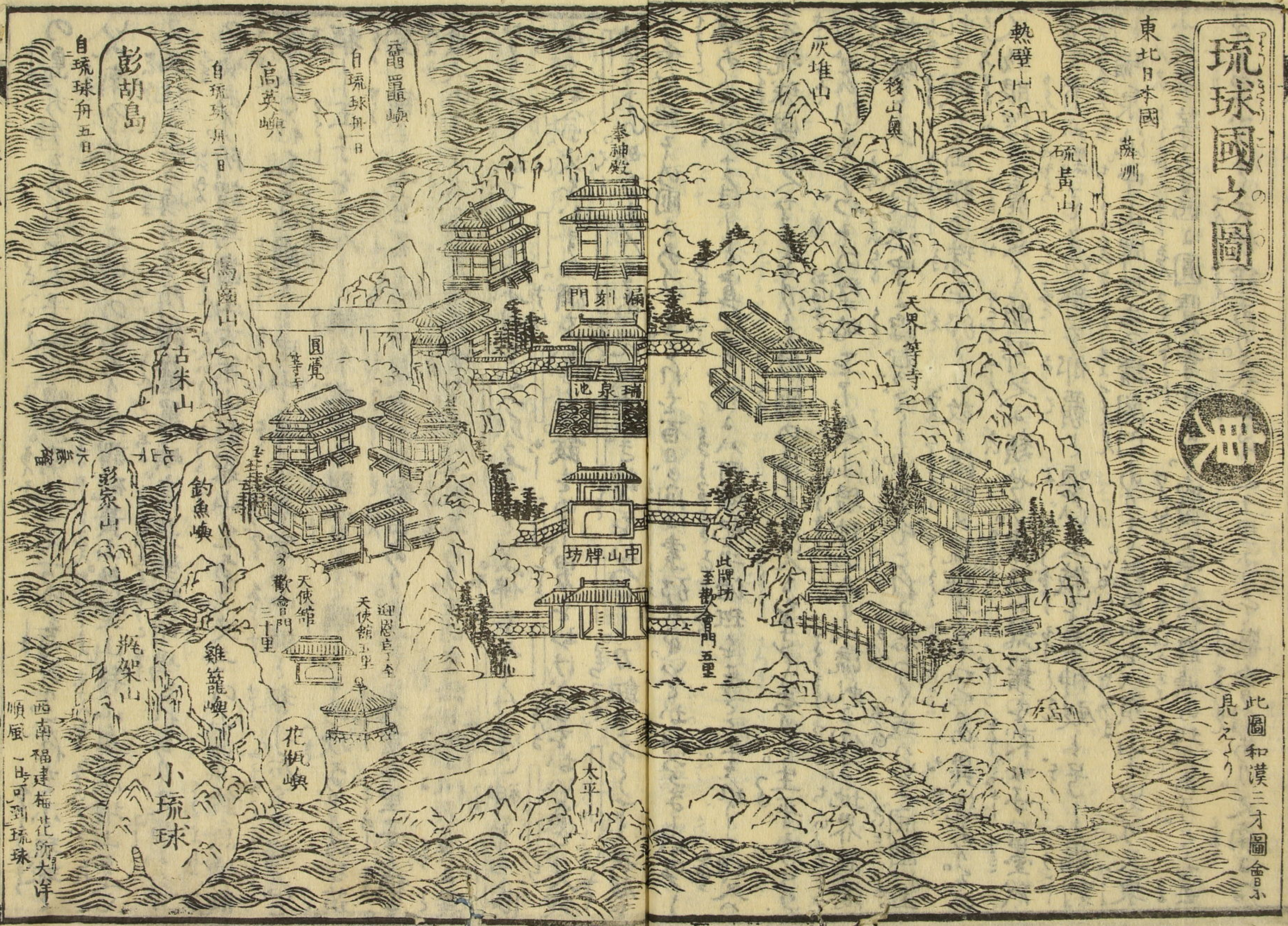
琉球國之圖

東北日本國

薩州

冊

此圖和漢三才圖會不見之



澎湖島

自琉球舟五日

自琉球舟二日

高英嶼

自琉球舟一日

雷羅嶼

奉神殿

門刻漏

池泉瑞

坊牌山中

古米山

圓鏡

影家山

釣魚嶼

雞籠嶼

瓶架山

小琉球

花瓶嶼

太平山

後山嶼

熱壁山

硫黃山

天界等寺

此牌坊至歡會門五里

迎恩堂

天俠館

歡會門

西南福建梅花所大洋順風一出可到琉球

琉球國之圖

二十一

の島あり。その山を太平山と喚ぶ。南北は又一つの島あり。これを小琉球と
 以南の海中は又四つの山あり。所謂硫黄山熱壁山移山奥灰堆山りよ
 又西北は二の嶼あり。所謂雷電嶼高英嶼彭胡嶋とれあり。又西は二
 の嶼あり。所謂馬齒山古米山彭家山とあり。又二の山あり。釣魚嶼瓶
 架山とれし。その國王を中山と号す。春宮を中城と稱し。后を中婦君と
 稱し。王子を王子と稱し。武士を親雲上と稱し。その次あるものを筑
 登と稱す。又官名は按司親方ホの數品あり。まへは美童を里子と稱す。
 庶人の子は太師金次郎金やといふ乳名あり。その言語日本は似く異
 なり。日をおてといふ。月をおつらふといふ。佛をやとけい。神をうめ。水
 水をおへい。火をおまつ。酒をおさけ。飯をぬ。男をおけ。女をおい。あ。火
 せう。よ。い。母をおへ。あ。兄。兄。弟。弟。刀。劍。を。衣。服。を。

い。か。と。い。ふ。の。餘。の。救。拳。小。違。あ。ま。ま。の。國。東。北。の。こ。れ。日。本。西。南。の。
 福建の梅花所ふして。大洋七日中。到るべし。往昔神功皇后
 三韓征伐のとき。流虬怕れ。駭の貢を獻致さる。以降彼洲
 人我白石硫黄島とまり。白石硫黄嶋人も又を。彼國不到りて交
 易せり。今ハそのの絶。りといふも。海十二の嶋人のをり。渡海も
 難もあり。とて。君。君。琉。球。へ。到。り。と。あ。ま。ま。の。内。に。と。ま。り。
 と。い。ふ。の。辯。舌。爽。ふ。事。審。は。述。へ。為。朝。ふ。く。海。を。び。ひ。て。れ。
 汝。の。を。忘。る。か。ま。の。彼。國。へ。到。ら。ん。と。又。易。し。大。勢。を。得。て。あ。ま。
 彼。國。民。疑。ふ。拒。し。も。あ。ま。の。紀。平。治。と。い。ふ。二。人。沖。の。小。嶋。に。商。
 人。は。打。扮。彼。外。より。便。船。し。彼。鶴。を。索。へ。但。一。貨。を。多。く。り。て。あ。
 どの事整し。と宣ひ。卷絹練高瀬の木綿。を擔け。せ。

春言正 兎片前篇卷之三

往^き得^えし^まく^まひ^い珠^{たま}を^らく^まら^うら^う懐^かみ^ふり^て用^{もち}意^い全^{ぜん}く^も備^{そな}り^たれ^ば景^か延^の
 を^ら治^ちへ^り。その^ち主^あ従^ま二^に人^に取^とり^て直^{ただ}沖^の小^こ浜^{はま}は^なき^に彼^か
 処^こより^り琉^{りゅう}球^{きゅう}へ^り列^りらん^とき^に啓^あ行^い多^たく^の阿^あ曾^そ忠^{ちゆう}國^{こく}以^い下^げ野^の家^か隸^{れき}ど^のの^ちの^ち
 ひ^やう^まに^は送^こさ^せら^れる[。]

此の巻は、
 昔、
 日本、
 東、
 西、
 南、
 北、
 の、
 方、
 向、
 を、
 示、
 し、
 て、
 其、
 の、
 地、
 理、
 を、
 説、
 ぶ、
 事、
 也、
 。

椿説弓張月前篇卷之二

